座談会

人生で大切なことを教えてくれたのは、太田ボーイズでした。

設立から30年。およそ300人のOBを輩出した太田ボーイズ。卒団した後も選手たちを「この子」と呼び、心から選手を愛する檜野武一監督と、５人のキャプテン経験者が集まり、当時の思い出や今になって生きている太田ボーイズの教えを語り合うとともに、後輩たちへのメッセージを熱く話しました。

太田ボーイズの思い出と「らしさ」

グラウンドに上下関係なし。厳しい練習と指摘し合う大切さ

厚川　太田ボーイズは、とにかく楽しかった。当時、中学生の硬式野球チームは少なくて、入団希望者は甲子園を目指すような意識が高い人ばかりでした。野球が大好きで、キツい練習も覚悟して来ていましたよ。それでも、ベースランニングはキツかったー。

井田　ベーランの声を聞くだけで気持ち悪くなりましたもん（笑）。僕は、足が遅かったので本当に辛かったですね。どう手を抜くか、ってことばかり考えていましたが、やめるという選択肢はありませんでした。

青木　練習はキツかったけど、ボーイズに行くこと自体が楽しかった。僕は、小学生のときから兄について太田ボーイズに来ていたのですが、みんなカッコ良くて、自分も入ると決めていました。入団してからは、野球をすること、仲間に会えることはもちろん、遠征先の宿舎でワイワイすることも楽しかったです。

赤岩　遠征から帰る途中、高速のサービスエリアに寄れることも楽しみでした。東日本大会で優勝したとき、監督が選手全員にサービスエリアのレストランでごちそうしてくれたことはよく覚えています。

藤野　僕はケガが多かったから申し訳ない、って思っていた記憶が強いですね。「ジャイアンツカップに出るぞ」と言われた日に骨折しました。

一同　笑

藤野　でもケガして監督の横にいた時間が長かった分、

檜野　武一（ひの・ぶいち）
監督
1956 年宮城県生まれ、小３で野球を始め、左投左打。
東北高校（甲子園出場なし）→早稲田大学→富士重工（ノンプロ）。1992 年より太田ボーイズ監督就任。『心技体知』の土台づくりを目指して指導を続けている。
東北高校で巡り会った竹田利秋先生のような指導者となって、先生と野球に恩返ししたい。

厚川　英俊（あつかわ・ひでとし）
３期主将
①太田南小バッファローズ→太田南中→農大二高→橋本フォーミング　②小学６年時、友達の親から体験会に誘われて　③現コーチ。「全力で声を出して回りを盛り上げていたことが評価され」（本人談）社会人野球でベストナインに選ばれた。

①球歴　②入団のきっかけ　③人物紹介

教われたことがいっぱいありました。「良いプレー・悪いプレーを指摘するのは学年関係ない」という監督の考えが浸透していたから、グラウンドの中では上下関係がなかった。これも太田ボーイズらしさですね。

将来を見据えた野球
自然にOBが戻ってくるチーム

赤岩　他から見たら、うちは変わったチームでしょうね。振り切って三振すると、監督が笑顔付きの拍手で迎えてくれるんです。「三振したいバッターはいない、打ちたくて打って失敗しても悪いことは何もない」というのが共通認識で、挑戦するという気持ちを大事にしてもらいました。

井田　それは今も変わらないですね。先日、息子（P14の囲み参照）が三振してベンチに戻ったとき、監督から「良く振った」と声をかけられたそうです。

赤岩　今でこそ、こういう指導をするチームが増えてきたかもしれませんが、20年前はほとんどなかったのではないかと思います。当時から左右のバランスを意識した練習に時間を費やすなど、近代的な野球をやらせてもらっていました。これは、自分たちの誇りです。

監督　指導者からすると、誇れるのはOBが戻ってきてくれること。高校野球が終わるとみんな挨拶に来てくれます。ふらっと練習に参加してくれる子もいる。厚川や赤岩はコーチとして戻ってきてくれました。途中で野球をやめた子、ベンチに入れなかった子、挫折した子たちがよく来てくれます。こんなチームはないと思います。有難いですね。

赤岩　みんなで一緒になって一生懸命野球して得たこと、太田ボーイズの存在が、人生の起点になっています。僕たちにとって、自然と戻ってくる場所なんだと思います。

太田ボーイズの野球

ティーチングからコーチングへ
甲子園が持つ本当の存在意義

監督　設立最初は、一球一球、投げ方や捕り方を教えるティーチングのスタイルでした。新生チームながら全国大会に出場し、強豪チームを破るほど強かった。当時、うちのバスの側面には「甲子園への近道」と書いてあったのですが、卒団生で甲子園に行ったのはたった１人（森村裕太さん・３期・松商学園）。そのとき気づいたんです。ボーイズで結果を出すのではなく、高校へ行って伸びるための力をどうつけるか。そのために教え込むのはなく、自分で気づき、自分の意志で身につけるのをどうアシストできるかが大事、と。そこからは、自分で気づいて答えを出すコーチングにシフトしました。７期くらいからでしょうか。

厚川　今は、技術はティーチングで、身につけた技術の使い方をコーチングで、と組み合わせながら指導しています。

監督　30年の中で全国大会に出場したのは３、８、13期。割合からすると10年に１回ですが、卒団生の30人近くが甲子園に出場しています。高校で階段を上った選手がいるということは、うちのチームのやり方は、間違ってなかったということ。この中では、青木が行っているね。

青木　桐一２年の夏に。甲子園は憧れの場所で、そこに行くためにボーイズに入ったので、夢がかなった瞬間でした。甲子園の舞台は特別。前の試合にマー君（田中将大投手）が登場して、熱が冷めやらぬ中での試合でした。相手は地元の東洋大姫路。満席の球場から今までに聞いたことのない歓声が響いてきて、身震いするほど感動しました。

井田　友和（いだ・ともかず）
７期主将
①剛志ジュニアーズ→境西中→伊勢崎工業高→㈱井田建築　②地元の先輩である太田ボーイズ３期・森村裕太さんに憧れて　③「野球に向き合う前に腰が引けた状態。本当に野球をやるのは高校」と監督に見抜かれ、来るべき時の準備としてキャプテンに抜擢された。

赤岩　一憲（あかいわ・かずのり）
８期主将
①美園小サンダース→館林四中→太田市商高→専修大学　②学童野球からのチームメイト割田、飯塚、荒木と体験に来て　③現コーチ。保護者から「太田ボーイズで良かった」という言葉を聞けることが喜び。中学、高校と主将でキャッチャー。

監督　夏を終えた高校３年生が、挨拶に来てくれる時――今までの話と相反するようですが――「甲子園に行ったかどうかは関係ないよ」と言うんです。大事なのは、甲子園に出場したことではなく、目標に向かっていかに努力したか。それが自信になり、財産になればいいと話します。

太田ボーイズの流儀

異色なキャプテン
「この子」でなければならない理由

監督　青木はシャイで、チームをしゃかりきになって引っ張るタイプじゃない。でも、ここで自分が言わなかったらチームが成り立たなくなる、という思いでやっていたと思うんです。立場を分かっていて、自分の性格を曲げてでも気合を入れて、ピンチを招く前に切り替えられる。実は、神奈川県の（甲子園優勝経験を持つ）高校の部長が、青木をひと目見て「あの子がいい」って。見る人が見ると分かるんだよね。チームを強くするにはこういうリーダーが必要だってことが。

藤野　僕はいまだになぜキャプテンに選ばれたのかわからないです。太田ボーイズ初の補欠のキャプテンで…。

監督　この代は、個性的なメンバーがそろっていてね。自分勝手だけどうまい子や、逆に下手だけど頑張っている子。その真ん中に藤野がいた。藤野は、人の心や行動に対する感性がずば抜けているんで

親子二代で太田ボーイズ

●厚川英俊さん（３期）、颯太さん（25期）

監督に息子の顔を見せに行ったことがきっかけで、息子本人が「太田ボーイズでやりたい」と言ってきました。非常にうれしかったのですが、あえてすぐにOKは出しませんでした。私にとって太田ボーイズは神聖な場所。中途半端な気持ちでやってほしくなかったので、諦めないこと、信念を持つことを約束。「強い意志や覚悟を持って自分で決めたのなら」と入団を認めました。選手から、保護者、コーチと立場は変わっても、監督から得ることがたくさんあります。親子そろって学ばせていただき、それが今も人生の基盤になっています。

●井田友和さん（７期）、一生選手（30期）

息子が野球を始めてから「中学でやるのなら太田ボーイズ」と私がずっと言っていました。自分が太田ボーイズで監督のお世話になって本当に良かったから、息子にも檜野野球のすばらしさを体感してほしかったのです。入団時から見ると、取り組み方が随分変わりました。今、３年生。ボーイズでの残された時間、全力で取り組んでほしいですね。

【監督から】　一生は気持ちと技術が一体化するときと、そうでないときがありますが、繰り返しながら確実に実力をつけてきています。高校に行ったら化ける。その姿はもう見えています。

藤野　卓哉（ふじの・たくや）
12 期主将
①韮川小ビックウィングス→太田城東中→前橋工業高→古河ロックドリル㈱高崎工場野球部監督　②学童のチームで見学。雨の日の練習に感銘を受けて感激して　③自分たちでやっていくにはどうしたらいいか？考え、行動する太田ボーイズの野球を社会人の監督としてやろうとしている。

青木　史隆（あおき・ふみたか）
13 期主将
①リトル宝雄→太田城西中→桐生第一高→文京学院大学　②５歳上の兄（８期一貴）が入団しており、先輩たちの姿にあこがれていた。　③甲子園出場経験者。岡島（豪郎選手・楽天イーグルス）に「すごい」と言わしめたキャプテンシーを持つ。

す。うまい選手の気持ちも、頑張ってもなかなか結果が出ない選手の気持ちも分かる。個性派ぞろいの代だったからこそ、力量を求める前に人格を見て藤野を選んだ。よくまとめてくれました。

井田　私もなんで自分かな、って。

監督　井田は高校では、キャッチャーしかないと思っていました。だからといって肩が強いわけでもなければ、キャッチングが良いわけでもない。でも、中学生のこの時代に人をまとめる、キャプテンという立場でチームを引っ張るという経験をしておけば、高校でも力を発揮することができると思ったんです。先の可能性を考えて選びました。

厚川　私もキャッチャーだけど、肩は強くなかった。

監督　キャッチャーで大事なのは、肩の強さではありません。大事なのは、みんなで守るという気持ちにさせること。厚川が一声かけただけで内野手の守備の構えが変わるというくらい、選手の気持ちを前に出させることができるんです。赤岩は、うまくなることに貪欲だったね。できるか、できないかは抜きにして。狙いは何か？やらなければならないことは何か？がよくわかっていたリーダーです。ビックリするのは、言ったことを全部覚えていること。中学時代にしたさりげない会話でも、本当によく覚えている。何でも吸収しようという意欲の表れですね。向上心の塊でチームを引っ張ってくれました。

数字が「自分の番号」になる背番号に込めた思い

監督　背番号を数字の羅列にしたくなかったんです。背負う番号に愛着を持ってもらいたいと思ったので、一人ひとりの特徴を見ながらつけています。代表的なところでは、日本で避けられがちは「４」は、歴代、負のイメージを吹き飛ばすような明るく楽しく野球をやる選手。既成の野球でない、独特の野球をしていた子には「０」をつけました。当時「０」という背番号は例がなかったのではないかな。

井田　私は、27番。キャッチャーの大先輩方がつけていた番号で重みを感じました。今ではすっかり自分の番号。現在のチームでも27をつけています。

厚川　私も27。思い入れがあって今のチームでも27です。

藤野　私は20番でした。憧れの倉上（将光さん・９期）さんがつけていた番号なので、すごくうれしかった。

青木　僕は「３」ですね。僕の背番号。それしかない(笑)。

赤岩　私は30、チーム内初の番号です。太田ボーイズ30周年、出場した全国大会は30回大会。縁を感じます。物事を何でもプラスにとらえることも、ここで学びました。

監督　兄弟の背番号を組み合わせて、車のナンバーにした保護者もいましたよ。保護者にとっても、背番号は思い入れのある特別な数字になるんですね。

保護者へ、そして子どもたちへ

子どもの成長のために、保護者の在り方とかけるべき魔法の言葉

厚川　息子がボーイズに入ってから、親の大変さも、子どもの成長もわかるようになりました。

井田　保護者の立場になって、父母会があって野球ができていたんだ、ということに気づきました。

藤野　「好きなようにやれ」と言ってもらって、好きにさせてもらっていたので有難いですね。

赤岩　私は、チームメイトの親が一緒に連れて行ってくれたのでやってこられました。それがなかったら

野球のできる環境ではありませんでした。感謝しかありません。

青木　親もボーイズが好きだったんだと思います。「お前たちのおかげでいろいろなところに行かせてもらった」と言ってもらえるのが、すごくうれしいです。

監督　印象的だったのは、卒団式に祖父母も来た家庭があったこと。さらに、私に手紙までくれて「孫が楽しそうに野球やって、たくましくなって甲子園まで出て。ついうれしくなって手紙を書いてしまった。すごく楽しかった」と。子どもが伸びると保護者が変わります。実は、預かったときに、すでに卒団時のイメージはできています。イメージ以上に伸びた子もいれば、そうでない子もいます。その差を生む要因のひとつは、やはり本人。努力したか、聞くだけで片付けてしまったかでは違ってきます。もうひとつは、太田ボーイズでよく言う「三位一体」。三位とは、選手、指導者、保護者。良いチーム作りにはこの三者が欠かせません。保護者にお願いしたいのは、子どもに野球を教えるのではなく、子どもに教わってほしいということ。今の野球は子どもの方が知っています。たとえば、子どもが三振したとき「どういう気持ちで打席に入っていたの？」と子どもの気持ちを引き出してほしいんです。こうすることで子どもは確実に伸びます。保護者は結果を出すではなく、努力することに期待して、努力してきたことを評価してあげてほしいですね。ほかの子と比べずに我が子の良いところ探しをして「お前ならできる」と背中を押してあげてほしい。大事なのは伸ばすことなのですから。

赤岩　コーチとして携わって、保護者の在り方は重要だと実感。結果ではなく中身にこだわってほしいですね。

監督　勝ち投手になったとか、ヒットを打ったとか。偶然の結果に惑わされないでもらいたいんです。

青木　僕は、ホームラン打って叱られたことがあります。

監督　偶然か必然か？偶然のホームランは次につながらないんです。称えられる三振と、叱られるホームラン。分かれ目は、未来につながるかどうかです。

子どもたちに感謝、大切なのは
野球の勝ち負けより、人としての成長

監督　私が持っている野球の経験は子どもたちからしたら異質なもの。与えるだけでも財産になるという思いがあります。太田ボーイズに関わった30年の中で「野球好きな自分」に気づくことができました。教える難しさを感じながらも、知らなかったことをいっぱい覚えられて勉強になります。うまくなりたいと一生懸命にのめりこんでいく姿を見て、自分の好きなことで子どもたちを伸ばす役に立てるなら、こんなにうれしいことはないですね。

厚川　監督が自分のお子さん以上に、ボーイズの子どもに接してくれているというのは、当時から伝わっていました。

監督　私自身がここで野球に関わって成長させてもらっているので、そのお返しを今の子と保護者にしたいんです。野球の裾野が広がっていけばいいなと思いますが、一方で野球でなくてもいいと思っています。人に関わって、人に何かプラスにできるようであれば。野球はひとつの方法論だと思います。実は、今、悩みがあって。それは、今の子たちにどうしたらもっと野球を好きになってもらえるか？ということ。明確な目標を持ってそれに対してのこだわりや徹底で、身につくものがありますが、明確な目標がないと難しい。その明確な目標をどう持つのか？どうすれば今の子たちに「刺さる」のか？常に考えています。もうひとつは、野球から離れたときの人としての基本的な接し方、共感する自分の思いの伝え方を、野球を通じて伸ばしていきたいと考えています。

厚川　監督は、一人ひとりを本当によく見ています。目標さえ定まれば、達成できる方法をいくつも知っています。信じてぶつかってきてほしいと思いま

す。

赤岩　30年に渡って信念を持って中学生を指導してきた監督。「目標」や「志」を高く設定できる選手へと皆、導いてもらいました。監督がしてきたことは、ものすごい社会貢献だと思います。こんなにいいチームはないと胸を張って言えますよ。

今は未来につながっている
だから懸命に、がむしゃらに

厚川　監督の話やボーイズで教えを、今の中学生が理解できるか？難しいところもあるけれど、必ずわかるときがきます。「高校で終わりでない、その先もある」というのは言葉通りですね。「理解したら実行、良かったら継続、ダメだったら一球で改善」とよく監督から言われると思うのですが、これは社会に出ても同じ。野球だけのことではないんです全部つながっているんですよ。

井田　ボーイズ時代が厳しすぎて、正直、何回辞めようと思ったことか。でも、中学ではなく、高校３年間やった後で「ボーイズで良かった」って父に言ったんです。監督に言われた言葉が、後になってわかってきたんですね。大人になるとさらにわかります。人としてすごく学べました。

藤野　ボーイズ時代は補欠で、高校でもベンチは入れなくて。決勝戦で桐一に負けたのをスタンドで見て、悔しい思いもありました。でも野球が好きだったので、今は会社のチームで監督をしています。全部教えるのではなくて考えさせる、という太田ボーイズの野球を社会人でもやろうとしています。自分たちでやっていくにはどうしたらいいか？ここで教わったことは、野球でも仕事でも生きています。

青木　僕も大人になって感じるものがすごく多いですね。当時はうまくなることしか考えてなかった。それだけ一生懸命やっていました。現役の子たちに言えるのは今、一生懸命頑張る。その一言に尽きますね。意味は大人になったら必ずわかります。

赤岩　バスでの移動中、監督の隣に座ってたくさんのことを学びました。両親からは「この時に学んだから今があるんじゃないか」と言われています。そのくらい、ここで得たことは大きく、人生の礎になっています。今の子に伝えたのは、無心になってやりきると突き抜けてわかってくるということ。たとえば、グラウンドで全力疾走すると相手チームの見方も変わる、自分も変わる。なぜ必要なのかわかってくるので、真摯に一生懸命やってほしいですね。

藤野　指導者の言葉を信じて一分一秒、一球一球、信じきってやってほしい。僕は、３年最後の大会でホームランを打たしてもらったんです。監督から「こういう球がくるから、ゴルフみたいに振り回して打ってごらん」とアドバイスをもらい、その通りにしたら、あっさりオーバーフェンスのホームラン。いつもは逆に振り回すなと言われているので、一瞬「え？」と思いましたが、信じていたので疑うことなくブーンと。泣きながら走ってホームベースを踏み忘れちゃったのですが。

一同　笑

赤岩　私も「打てなかったら監督のせい」くらいに思っていました。そのくらい信じ切っていた。うちの監督に言われているんだからできるはずって。逆のことを言われても対応できますね。信じてやる、やり続けるとおのずと結果はついてきます。

井田　今の選手には、もっとがむしゃらになってやってほしい。こんな良い指導者に恵まれているのですから、何も疑うことなく一心不乱に、合言葉の「全力の声、全力疾走、全力のカバーリング」を、泥だらけになってひたむきに、これ以上できないという「全力で」挑んでもらいたいですね。太田ボーイズの野球は根性論じゃない、理論的で先を見据え、さらに人間形成に関わる野球です。確実に人生が変わります。そうと知ったら、一球に、一振りにかける思いは違ってくると思うんですよ。

（以上）

大学・社会人での活躍

岩崎　巧（19期）
法政大→日本製鉄室蘭シャークス
高校時代は１年生の春季大会から先発投手として活躍したサウスポー。法大を経て、北海道の地から社会人の頂点を目指す。

古川　幸拓（19期）
白鷗大→スバル
高校時代は投手としても140キロを越える速球を投げた。本職の内野手として現在もNPBを目指す。都市対抗、日本選手権での今後の活躍に期待。

金田　祐司（９期）
上武大→スバル
高いディフェンス能力を武器に巧打の内野手として活躍。晩年は外野もこなしたユーティリティプレーヤー。

関　大輔（２期）
国士舘大→河合楽器→西濃運輸→太田市役所
高校から捕手に転向も類い稀なる運動能力を武器に活躍し、現在も現役で選手兼監督。

藤家　輝（21期）
拓殖大
高校時代は一年生から主砲として活躍した大型内野手。ボーイズ時代から大学時代まで最高学年時に主将を務めた。

川﨑　博文（６期）
上武大→ＪＲ東日本東北
大学、社会人時代と投手一筋。
多彩な変化球と投球術、総合力の高さを武器にマウンドで躍動した。

上岡　正慎（７期）
東洋大→ホンダ
第２回世界大学野球選手権大会日本代表。ホンダ時代は、長野（現広島カープ）とクリーンアップを担った。俊足強打の外野手。プロ入りは実現ならなかったものの天性のアーチストで、多くのファンを魅了した。

高橋　将幸（22期）
共栄大
高校時代、選手権大会予選で３ホーマーを放った内野手。大学を経て、現在はサンデン野球部で活躍中。

伊藤　彰大（13期）
東洋大→群馬ダイヤモンドペガサス→埼玉武蔵ヒートベアーズ
桐生第一の主砲として甲子園出場後、名門東洋大を経て独立リーグからＮＰＢ入りを目指した外野手。

藤田　遼（14期）
常磐大→きらやか銀行
きらやか銀行時代は主将兼外野手としてチームを牽引。ファイト溢れるプレーを武器に東京ドームで輝きを放った。努力を積み重ね、道を切り拓いた。

植松　正俊（７期）
上武大
神宮球場で２本のホームランを放った。確実性の高い中距離ヒッターとして活躍した。現太田ボーイズコーチ。

飯塚　直也（14期）
獨協大
硬式グラブチームに所属したのち、現在は実業団軟式野球チームで活躍中。人気野球YouTuberと共演。両投両打で検索。